

日本語学習者による原因・理由を表す接続助詞「から」「ので」の 語用論的使い分け能力の習得を探る横断的研究

畠山 衛

[要 旨]

原因・理由を表す接続助詞「から」「ので」は多くの場合、置換可能である（前田 2000、小西 2010）。しかし、例えば授業を休んだ理由を聞かれた学生が「頭が痛かったから休みました」と言うとき欠席の正当性を主張するように聞こえ、学習者が意図せずに語用論的誤用（Thomas, 1983）を産出することにつながってしまう危険性があるため、両者の使い分けは日本語学習者にとって重要な学習項目と言える。

先行研究に見られた依頼や誘いに対する断りに加え、提案に対する断り、指示、助言、報告などの言語行為における使い分けについて、日本語学習者（34名）と日本語母語話者（46名）に対して二者択一のアンケートを実施し、一部の学習者（14名）に対して聞き取り調査を行った。その結果、母語話者の選択は高い収束を示す項目もあったのに対し、学習者はほとんどの場合において母語話者の多数派と同じ選択をする傾向があるものの、母語話者に比べて収束度が低い傾向があった。さらに、「から」の習得が「ので」の習得に先行する可能性が示唆された。学習者は話す相手や場面によって求められる丁寧さ、前接形式などをもとに使い分けを判断していた。母語話者のほとんどが「ので」を選択したような改まり度の高い場面での依頼、詫び、依頼に対する断り、誘いに対する断りなどで、特に文末に言い切らない「ので」の使用の促進が望まれる。

[キーワード]

接続助詞「から」「ので」 語用論的誤用 (Pragmalinguistic failure)

1. はじめに

接続助詞「から」「ので」は意味の上ではどちらも原因や理由を表し、多くの場合、入れ替えても差し支えない。しかし、萩原（2010）の指摘する通り、学生が教師に対して詫びるといった改まり度の高い場面では、「から」は「押し付けがましく（…）不自然」（p.132）であり、「ので」が使われるべきであろう。このように特定の言語行為内の両者の使い分けは、語用論上問題になる場合もある。そこで、本研究では「から」「ので」の使い分けについて、日本語母語話者と日本語学習者を対象にアンケート調査を行い、分析した。また、一部の学習者に対して使い分けに関して、どのように判断したのか聞き取り調査を実施した。

2. 先行研究

原因・理由を表す接続助詞「から」「ので」は長くその違いが議論されてきた。その先駆的存在として永野（1952）の研究が挙げられる。永野によると、「から」と「ので」はどちらも前件を後件の原因・理由として示すが、推量、見解、意思、命令、依頼などが後件に来る場合、これらは表現者の主観に基づくものであり、「から」が使われるとする。逆

に、表現者の主観によらず、自然・物理的現象などの客観的な原因・理由の関係を示す場合には「ので」が使われるとした。このように「から」を主観、「ので」を客観とする永野説は定説化し、日本語教科書にもその違いの記述が見られ、さらに、使い分け意識について聞かれた学習者も「から」の主観性、「ので」の客観性を挙げたという報告もある(小西 2010) ほど広く浸透しているようである。ただ、実際には「から」と「ので」は使用範囲の重なりが大きく、置換可能な場合が多い(前田 2000、小西 2010)。

しかし、依頼や断りなど待遇表現上、より話者のフェイス(Brown & Levinson, 1987) が脅かされるような言語行為(speech acts)において使用される場合には、誤った選択は学習者が意図せずに語用論的誤用(pragmalinguistic failure)(Thomas, 1983)を産出することにつながってしまう。例えば、目上の立場の人からの誘いを断る場合に「用事があるから行けません」と「から」を使うと、誘われたことよりも自分が既に予定していたことを優先させ、行けないことを正当化するように聞こえてしまう(藤森 1995)。このような状況を回避するためにも、「から」「ので」の使い分けは重要な学習項目と言える。

これまで、日本語学習者の「から」「ので」の使い分けについては、自由発話(小西 2010)や談話完成テスト(Discourse Completion Test: DCT)(藤森 1995、周 2009)を用いて、日本語学習者と日本語母語話者の比較が行なわれている。

小西(2010)は、中級以上の学習者11名(学習歴6か月から16年)を対象に、特定の言語行為とは関係なく、自由発話における「から」「ので」の使用実態を調査し、さらに一般的な使い分け意識について各自にインタビューを行った。小西によると、一般に「から」と「ので」を均等に使うのは日本語能力が高い学習者に限られ、そうでない学習者の場合は、どちらか一方に偏って使う傾向があり、多くの場合「から」ばかりを使う傾向が見られた。意識調査では、学習者の多くが使い分けのべきものとして意識しているものの、使い分けは難しく、あまいだと感じていることを報告している。使い分けの基準として明示されたものには「から」を「主観的」、「主張が強い」、「固い表現」、「ので」を「客観的」、「自己主張が弱い」、「柔らかい」、「丁寧」というようにそれぞれに対立する概念で説明する場合が多かった(小西 2010, p.5)。

藤森(1995)は、韓国語または中国語話者である中級以上の学習者111名(学習歴6か月から6年)を対象に誘い及び依頼を断る4つの場面での談話完成テストを使用し、断る理由を述べる弁明部分の文末・節末形式の分布を日本語母語話者による産出の分布と比較した。藤森は文末・節末形式を、「ので」「から」以外に、ノダ型(用事があるんです)、テ形型(用事があって)、命題直接提示型(用事があります)、シ型(用事があるし)と全6種類(p.83)の形式に分け、分析した。その結果、母語話者は、親しい相手に対しては半数近くが「から」を使用したものの、親しくない相手には、「ので」の使用が伸び、「から」とほぼ同じだけ使用していた。一方、学習者の場合は、親しい相手に対してはやはり「から」が一番多いものの、母語話者ほどには顕著な使用が見られなかった。一方、目上に対する断りでは、母語話者の半数以上、学習者も約半数が「ので」を使用していた一方、母語話者の「から」の使用は5%以下であったが、学習者では「から」の使用が25%と高かった。このことは学習者が目上の相手に対する断りの場面で、不適切に「から」を使用する傾向があることを示唆している。

周(2009)は中国語を母語とする初級後半以上の学習者131名と日本語母語話者40名を対象として誘いに対する断りを抽出する談話完成テストを実施した。その結果、母語話者は目上

の相手に対しては「から」をほとんど使わない(2-7%)のに対して、同級生や目下の相手に対しては「から」を多用していた(24-41%)。一方で、学習者は目上に対しても「から」の使用が多く(25-46%)、同級生・目下に対する使用(18-41%)と大きく変わらなかった。「ので」の使用では、母語話者の8割以上が親疎にかかわらず目上の相手に対して「ので」を使ったのに対して、学習者のうち目上の相手に対して「ので」を使ったのは4割程度にとどまった。また、母語話者は同級生および目下の相手に対してはほとんど「ので」を使わない(2-5%)のに対して、学習者の同級生および目下の相手に対する「ので」の使用は少なくなかった(10-32%)。

このように、先行研究では日本語母語話者が目上に対して「ので」を多用し、「から」はほとんど使わないのに対して、学習者は目上に対しても「から」を使うことが少なくなく、逆に母語話者がほとんど使わない目下に対する「ので」を学習者はかなり使ってしまう傾向があり、使い分けが十分でないことが見られた。しかし、先行研究では「から」「ので」の使用される状況が依頼や誘いに対する断りを行なう際の弁明に限られており(藤森1995、周2009)、他の場面での使い分けに関して知見が得られていない。また談話完成テストでは、理由を示す言語形式として、「から」「ので」以外のものも使われ、二者間の使い分けに限定しにくい。そこで、本研究では「から」と「ので」の選択を抽出する状況を、依頼や誘いに対する断りに加え、提案に対する断り、指示、助言、報告などに拡大した上、二者択一のアンケートを作成し、母語話者および学習者に実施することとした。

3. 研究課題

本研究では、初級で導入される原因・理由を表す接続助詞の「から」と「ので」の使い分けについて、中級以上の学習者を対象に、さまざまな言語行為(詫び、依頼、指示、提案、断りなど)に伴う場面における使い分けおよび判断を下す際に用いる基準について知見を得ることを目的とし、研究課題を以下の通り設定した。

研究課題1 学習者の「から」と「ので」の使い分けは母語話者の使い分けとどのように異なっているか。

研究課題2 学習者は「から」と「ので」の使い分けの選択をどのような基準を基に行っているか。

4. 方法

4-1. 調査時期・調査対象者

本研究の調査時期は2011年春学期および夏学期であった。春学期には米国の大学において外国語として中級以上の日本語を履修していた学習者58名に参加を依頼し、29名より回答を得た。そのうち23名がすべての項目に回答したが、うち1名は日本語母語話者であったため、分析からは除外した。残りの22名のうち、6名に聞き取り調査を行った。夏学期には、日本の大学において夏期短期留学プログラムに参加していた中級以上の学習者27名に依頼し、15名より回答を得た。そのうち12名がすべての項目に回答し、さらに、8名に聞き取り調査を実施した。春学期の学習者は主に二学年に、夏学期の学習者は中級相当の三クラスにまたがっていた。日本語母語話者にも同一のアンケートを実施し、47名から

回答を得て、うち 46 名がすべての項目に回答した。母語話者は、7 割以上が日本の会社での就業経験がある成人で、約 4 割は日本語教育の従事者または経験者であった。回答者の年齢は研究への参加条件としてあげた 18 歳以上という制限を全員が満たしていたが、それ以上は問わなかった。先行研究では母語話者の年齢は 20-30 代（藤森 1995）、大学 4 年生（周 2009）などに限定されていた。しかし、20 代から 50 代の日本語母語話者の職場における自然談話を基にした年代別、男女別の「から」「ので」の使用研究（谷部 1997、2002）によると、50 代では「ので」の使用が特に少なく、年代が下がるごとに「から」と「ので」の使用の差が縮まるという傾向があったものの、「から」は場面の改まり度によらず多く使われ、「ので」は改まった場面に多く現れるという場面の改まり度による使い分けの傾向は性別、年代によらず見られたこともあり、本研究では回答者の年齢を問わなかった。しかし、本研究では自然談話内の使用ではなく、使い分けのアンケート調査という異なる性質のデータであり、年代による回答の違いが見られる可能性は否定できず、今後の調査が望まれる。

4-2. 手続き

本研究は調査の実施に先立ち、その実施計画案が筆者の所属大学における実験審査委員会（Institutional Review Board: IRB）の所定の審査を受け、承認された。その後、オンラインのアンケートサイトを利用し、ベースラインとなる日本語母語話者からの回答を収集した。また、各学習者宛にオンライン・アンケートへのリンクを E メールで送付し、調査への参加を希望した学習者がクラス外にコンピューター上でアンケートに回答した。全ての項目に回答した学習者 34 名のうち 14 名にのみ各項目の選択理由について個別に 20 分程度聞き取り調査を併せて行った。

4-3. アンケート調査

アンケート調査には、インターネット上で回答・集計の可能なオンライン・アンケート SurveyMonkey（www. surveymonkey.com）を使用した。アンケートは下記の表 1 の通り、25 項目からなった。

表 1 「から」「ので」使い分けアンケート項目

項目	言語行為	改まり度	話者の関係
#1	詫び	高	学生から教師に
#3	依頼に対する断り	高	従業員からマネージャーに
#5	誘いに対する断り	高	部下から上司に
#6	提案に対する断り	高	学生が教師に
#8	誘いに対する断り	低	友人から友人に
#10	依頼	低	妻から夫に
#11	依頼	高	学生から教師に
#12	助言	低	友人から友人に
#14	詫び	低	友人から友人に
#16	報告	低	夫から妻に
#18	指示	高	消防士から会社員に
#20	提案に対する断り	低	友人から友人に
#22	依頼に対する断り	低	友人から友人に
#24	助言	高	旅行会社社員から顧客に
#25	指示	低	母から娘に

表に掲載されていない10項目は「から」「ので」と同様に意味上の違いがほとんどないが使い分けが問題になることもある文法項目についての錯乱肢であった。「から」「ので」の使用場面では先行研究で見られた依頼と誘いに対する断り以外にも依頼、助言、詫び、指示などの言語行為を含めた。各項目とも場面の設定は英文で行い、未習の漢字や語彙による混乱を防ぐため判断対象の文には英訳をつけた。ただし、「から」「ので」の部分はどちらも「because」とした。回答は二者択一で、「から」または「ので（んで）」を含む文節のどちらかを選ぶものであった。各項目における選択肢の提示順序は、順序効果を防ぐために、個人ごとに自動的に無作為化された。

アンケートの質問の例は以下の通りである。

#1. Situation : Professor mentions that a student did not come to class the day before. The student explains why she was absent.

先生：昨日クラスに来ませんでしたね。

学生：すみません。頭がとても_____休みました。

Professor: You didn't come to class yesterday.

Student: I'm sorry. I stayed home because I had a really bad headache.

・ 痛かったから

・ 痛かったので

4-4. データ分析方法

まず、母語話者の回答について「から」または「ので」のどちらかに集中する度合いを測るために、個別の回答数の全体に占める割合を収束率（各項目における回答数／全回答数＝収束率）と呼ぶことにし、「から」「ので」15項目について計算した。母語話者の各項目における収束率を集計したところ、全体の平均としては89.7%、標準偏差は12.7であった。下記の表2の通り、収束率は上は100%から下は63%と幅があり、項目によって全員が同じ回答をしたものと回答がわかるものがあった。

全15項目のうち、10項目（「から」6項目、「ので」4項目）に93.5%以上の高い収束が見られた。第二言語の言語テスト作成の指針として、Lado（1961）は母語話者の95%以上が一致した項目を採用すべきであろう（p.94）とした。また、第二言語の語用論的能力の習得研究において、Taguchi（2007）の英語母語話者は暗示された意見と断りの理解度を測るタスクでそれぞれ97.67%、96.29%（p.325）と高い収束率を見せた。しかし、スペイン語における許可願い表現における句型選択の研究（Pinto, 2005）では母語話者の一致度は87%（p.9）にとどまるなど、規範となる母語話者の回答の収束率の基準には幅が見られるものの、使用されるタスクの改訂の過程で、項目を選別し高められるべきであると思われる。そこで拙論では、僅差ではあるが、あえて93.5%の収束率を示した2項目を対象から外すことにし、95.7%以上の全8項目（「から」「ので」それぞれ4項目）を母語話者規範（native speaker norm）として設定することにした。これらの項目において学習者が母語話者と同じ回答をするごとに得点を付与し、便宜上その点数の合計を学習者の「から」

「ので」使い分け能力指数とし、その分布を分析した。さらに、「から」「ので」使い分け能力指数が高い学習者から低い学習者まで、それぞれが使い分けの判断をどのように行ったかなどについて聞き取り調査を行い、分析した。

5. 結果

5-1. 研究課題 1 に対する結果

研究課題 1 は「学習者の「から」と「ので」の使い分けは母語話者の使い分けとどのように異なっているか」であった。まず、母語話者の使い分けの結果であるが、母語話者の選択の収束が高かった順に並べると下記の表 2 の通りであった。

表 2 母語話者と学習者の「から」「ので」使い分け結果の比較

項目	から/ので	言語行為	改まり度	母語話者	学習者	差
#10	から	依頼	低	100.0%	52.9%	47.1
#11	ので	依頼	高	100.0%	76.5%	23.5
#12	から	助言	低	100.0%	67.6%	32.4
#25	から	指示	低	100.0%	73.5%	26.5
#1	ので	詫び	高	97.8%	64.7%	33.1
#3	ので	依頼に対する断り	高	97.8%	58.8%	39.0
#8	から	誘いに対する断り	低	97.8%	70.6%	27.2
#5	ので	誘いに対する断り	高	95.7%	44.1%	51.6
#20	から	提案に対する断り	低	93.5%	61.8%	31.7
#22	から	依頼に対する断り	低	93.5%	67.6%	25.9
#6	ので	提案に対する断り	高	84.8%	38.2%	46.6
#16	から	報告	低	80.4%	61.8%	20.8
#18	ので	指示	高	73.9%	29.4%	44.5
#14	から	詫び	低	67.4%	44.1%	23.3
#24	ので	助言	高	63.0%	52.9%	10.1

目上の相手に対する発話、つまり改まり度の高い場面では「ので」を、逆に対等または目下の相手に対する改まり度の低い場面では「から」を使う傾向がはっきりと現れた。これは母語話者は目上に対しほとんど「から」を使わないという先行研究（周 2009、藤森 1995）による知見と一致する。さらに、母語話者の職場での話し言葉における使用頻度において、改まった場面での「ので」の多用とくつろいだ場面での「から」の多用という傾向（谷部 1997、2002）とも一致する。

学習者と母語話者の「から」「ので」の使い分けの違いを見ると、すべての項目において学習者は母語話者よりも収束度が低く、回答が分散する傾向にあった。たとえば 4 項目（#10、#11、#12、#25）において、母語話者は全員同じ回答をしたのに対して、学習者の回答は母語話者と同じ回答のほうが多かったものの、約半数（#10、52.9%）から 8 割弱（#11、76.5%）にとどまった。これは、母語話者には選択が明らかな場面においても、学習者の選択は分散し、選択能力が発達過程にあることによるものと思われた。

母語話者の収束率と学習者の収束率の差は 10.1 ポイント（#24）から 51.6 ポイント（#5）と開きがあった。このうち母語話者と学習者の収束率の差が 30 ポイント以上と大きかったものは 8 項目あった（#5、#10、#6、#18、#3、#1、#12、#20）。このうち、母語話者の収

束率が90%以上と比較的高かったもの、つまり母語話者は9割以上が同じ回答を選んだのに対して、学習者と母語話者が異なる選択をする傾向が高かったものは5項目あり、差が大きかった順に上司からの誘いに対する断り（ので）#5（51.6）、妻から夫への依頼（から）#10（47.1）、マネージャーからの依頼に対する断り（ので）#3（39.0）、学生の教師に対する詫び（ので）#1（33.1）、友人から友人への助言（から）#12（32.4）、友人から友人への提案に対する断り（から）#20（31.7）であった。

また、母語話者がほぼ全員「ので」を選択している改まり度の高い場面の依頼（#11）、詫び（#1）、依頼に対する断り（#3）、誘いに対する断り（#5）においても、学習者のうち「ので」を選択できたのは4割から6割程度にとどまった。特に上司からの誘いに対する断りの場面（#5）では母語話者の95.7%は「ので」を選んでいるのに対して、「ので」を選んだ学習者は44.1%で「から」を選ぶ学習者のほうが多く、語用論的誤用を招く危険性が高く、指導が必要な項目であろう。この項目で「から」を選択した学習者のうち聞き取り調査で最も多く（14名中3名）挙げられた理由は、『「ありますから…。」と『から』で終わるのを聞いたことがあるが、『ありますので…。』のように『ので』で終わるのは聞いたことがない』、『ので』の後は文が来なければいけない感じがする』というように、文末を言い切らない「ので」の文型に対する抵抗によるものであった。

前述の通り、母語話者の収束率が95%以上と極めて高かった8項目（「から」・「ので」それぞれ4項目ずつ）を便宜的に学習者の「から」・「ので」の使い分け能力を測るための基準として、分析を以下の通り試みた。その8項目とは、上記表2の上位8項目である（「から」：#10、#12、#25、#8；「ので」：#11、#1、#3、#5）。これら8項目において、学習者が母語話者の回答と同じ選択肢を選ぶごとに1点加算し、各学習者ごとに合計点を計算した。それによると点数の平均は5.09、標準偏差は2.04であった。合計点を横軸に、各合計点毎の学習者の人数を縦軸にグラフにしたものが下記の図1である。この図によると4点と7点が特に高く、二峰性分布（bimodal distribution）を示していることがわかった。このことから、大まかな傾向として、使い分け能力が平均よりも高いグループと低いグループの二つのクラスターに分けられる可能性が示唆された。

図1 学習者の「から」「ので」使い分け能力指数合計点の分布

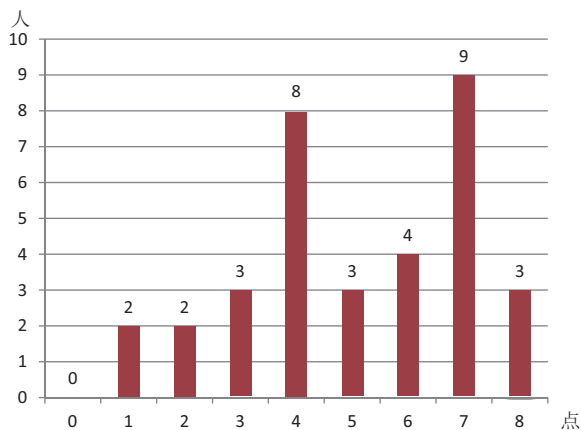
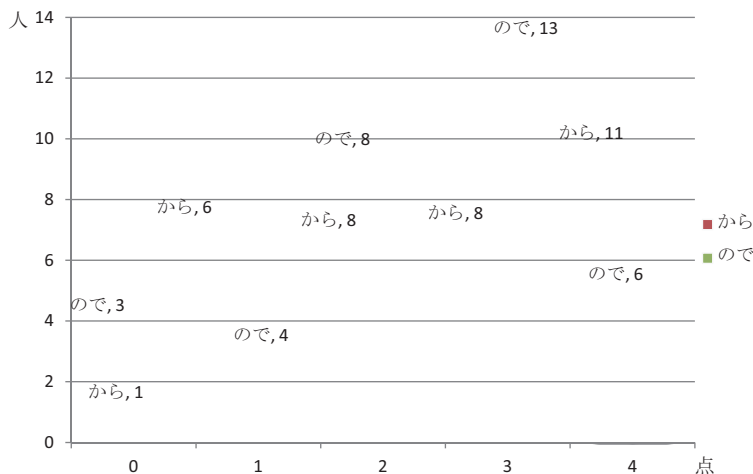


図2 学習者の「から」「ので」個別の使い分け能力指数の分布



さらに、「から」と「ので」それぞれの指数の分布を、指数を横軸に、指数ごとの学習者の人数を縦軸にグラフにしたものが上記の図2である。「から」の使い分け能力指数の平均は2.65、標準偏差は1.20で、「ので」の平均は2.44、標準偏差は1.19であった。両者の分布をT検定したところ統計的に有意な差は見られなかった ($t(66) = 0.711, p > .05$)。

しかし、「から」のほうがわずかに平均が高いことと、図2における傾向として、「ので」に比べて「から」のほうがやや右よりの分布を示していることから、「から」のほうが「ので」よりも全体的により習得が進んでいる可能性が示唆された。この理由としては、まず大関(2008)の指摘するとおり、日本語教育の現場を通したインプットとして初級教科書で「から」が先に導入されがちであることが考えられる。また、もう一つの理由として、教室外の実際の日本語使用からのインプットにおいても「から」の使用される頻度が高いことが考えられる。全体を通して比較した場合「から」のほうが「ので」よりも頻度が高いことは、書き言葉(現代日本語書き言葉均衡コーパス)、くだけた場面の話し言葉(名大会話コーパス)(小西2009)、職場における話し言葉(谷部2002)においても指摘されている。

さらに調査対象者の使い分けの差を調べるため、学年別の分析を行った。この分析のみ、春学期に米国内の大学で収集したデータに限定した。理由は、以下の通りである。同データは、一つの大学のプログラム内の異なる学年の学習者のものであり、日本国外にいたために教室外でのインプットも限られる環境下で日本語学習を続けてきており、調査時までの既習内容がより均一化されていることが予想される。一方、夏学期のデータはブレースメントテストによって適切にクラス分けがなされているとはいえ、異なる環境で学習してきた参加者が少なくないことから、プログラム参加時までの学習内容の差がより大きいことが予想されたためである。

春学期には2年次クラス(中級)、3年次クラス(上級)、およびコンテンツベースにより日本語で日本文化について学ぶクラス(文化)があった。文化のクラスは3年次相当以上のため、文化のクラスだけを履修しているものは上級の学生と同じグループに含めた。上級、中級のそれぞれについて母語話者の回答の収束と同じ選択をした学習者の割合を示

したものが下記の表3である。

表3によると、「から」においては上級の学習者は#12以外のすべての項目において、中級の学習者に比べてより母語話者に近い選択を行った。それに対して、「ので」を見ると、上級の学習者が中級の学習者よりも50%を超えて、母語話者に近い選択を行ったのは1つの項目(#11)だけであった。以上のことから、「から」の習得のほうが「ので」よりも先行していると思われる。

#11は学生が試験の日を変えてもらえるように教師に依頼するという改まり度の高い場面で、日本語母語話者は全員が「ので」を選択した項目である。上級の学習者の87.5%(=8人中7人)が母語話者と同じ「ので」を選択したのに対し、中級で「ので」を選択したのは64.3%(=14人中9人)だった。このような教師に対する依頼の場面というのは中級以降の教材でのロールプレー等での設定としても珍しくなく、学習歴の長い上級の学習者がより馴染みのある場面だったためこのような結果になったのではないだろうかと思われる。

表3 上級と中級クラスの学習者の「から」「ので」使い分けの比較

項目		母語話者	上級(n=8)	中級(n=14)	差
#10	から	100.00%	75.00%	42.90%	32.1
#12	から	100.00%	62.50%	71.40%	-8.9
#25	から	100.00%	87.50%	57.10%	30.4
#8	から	97.80%	87.50%	71.40%	16.1
#20	から	93.50%	87.50%	64.30%	23.2
#22	から	93.50%	75.00%	64.30%	10.7
#16	から	80.40%	62.50%	57.10%	5.4
#14	から	67.40%	50.00%	42.90%	7.1
#11	ので	100.00%	87.50%	64.30%	23.2
#1	ので	97.80%	50.00%	57.10%	-7.1
#3	ので	97.80%	50.00%	42.90%	7.1
#5	ので	95.70%	25.00%	50.00%	-25
#6	ので	84.80%	37.50%	35.70%	1.8
#18	ので	73.90%	25.00%	28.60%	-3.6
#24	ので	63.00%	37.50%	50.00%	-12.5

一方、#12は科目選択に関して、履修した学生が友人に対して助言するという改まり度の低い場面で、日本語母語話者は全員が「から」を選択した。母語話者と同じ「から」を選択した学習者は、上級が62.5%(=8人中5人)、中級が71.4%(=14人中/10人)であった。しかし、上級の人数が少なかったため、一人多く8人中6人が「から」を選択していた場合は75%となり、結果が反転することになってしまうほど、上級と中級の差は大きくなかったとも言える。

5-2. 研究課題2に対する結果

研究課題2は学習者は「から」と「ので」の使い分けの選択をどのような基準を基に行っているかであった。学習者が個別の項目の回答をする際にどのような基準を基に選択をしていったのかを探るために、使い分け能力指数が高い(8点中8点)学習者から低い(8点中1点)学習者まで学習者14名を対象に、一人あたり20分前後をかけ、聞き取り調査を行った。聞き取り調査の対象者の一覧は下記の表4の通りである。インタビューはそれ

それぞれに春学期は英語で、夏学期は日本語で行われた。使い分け指数の算出のもとになった8項目だけでなく全項目について聞いた。

聞き取り調査によると、どのように選択を行ったかという点について、多くの学習者（A、C、E、G、H、I、K）は両方を言ってみて自然に聞こえた方を選ぶという暗示的知識（implicit knowledge）（Ellis, 1993）にもとづいて判断するという方略をとったと回答した。それらの学習者は、自分の行った選択について理由を聞かれてもうまく説明できなかった場合に、「なぜかはわからないが自然に聞こえるほうにした」と報告することが多かった。母語話者同様に、説明できない、つまり宣言型知識（declarative knowledge）がないからといって、理解しておらず運用できないというわけではない（Ellis, 2008）ということも考慮する必要があるであろう。

表4 聞き取り調査対象者

学習者	使い分け 指数 (最高点8)	性別	既習言語	日本滞在経験	クラス
A	8	女	韓国語、英語	なし	春（中級）
B	8	男	英語	3ヶ月未満	夏（5）
C	7	男	韓国語、英語、スペイン語	なし	春（上級）
D	7	男	フランス語、英語	3年未満	春（中級）
E	7	女	韓国語、英語	1ヶ月未満	夏（5）
F	7	女	英語	3ヶ月未満	夏（4）
G	7	男	中国語、英語	1ヶ月未満	夏（5）
H	6	女	韓国語、英語、スペイン語	1ヶ月未満	春（上級）
I	5	男	英語、フランス語	3ヶ月未満	夏（6）
J	4	男	中国語、英語	1年未満	夏（4）
K	3	女	英語	6ヶ月未満	夏（4）
L	3	男	英語、その他（不明）	なし	春（中級）
M	2	女	英語	なし	春（中級）
N	1	女	中国語、英語	6ヶ月未満	夏（4）

それぞれの学習者にアンケートの項目一つずつについて「から」か「ので」を選ぶ判断基準について尋ねたところ、得られた回答は、主に次のような種類に分類できた。(1) 話す相手、(2) 丁寧さ・改まり度・場面、(3) 前接形式、(4) 独自の基準である。その具体例は「から」の場合、以下の通りであった。学習者は、(1) 話す相手としては、友達（A）、同じ立場の人（C）であり、(2) 丁寧さ・改まり度・場面は、くだけた話し方（B、G）のとき、つまり、インフォーマル（A、H）・カジュアル（H、I）な状況、または命令（#18）などのように叫んでいるようなとき（I）、「ので」に比べてより「直接的」（D）で、「丁寧じゃない」（B）場合に「から」を選んだと答えた。逆に、「から」のほうが「ので」よりも「丁寧」（N、K）と思い込んでいた学習者もいた。

次に、(3) 前接形式では、「ありますから」（#5）のように敬体が前接するとき、「から」にしたという学習者（I、J）がいた。この方略は、特にJの場合、#24、#25で「ので」、#8、#10、#22で「から」と母語話者とは逆の選択につながることも多かった。また、このよ

うに目上の立場の相手に対して断る場面で「ありますから…。」と文を終えるような使い方は初級の教科書ではよく見られるが、これこそが、大関（2008）の指摘する弊害を伴う代用の例ではないだろうか。つまり、本来「ありますので…。」と「ので」を使うべき文脈であっても、初級のある段階までは「から」を代用しそれが正用であるとしてしまうことが誤用を生む自動化につながるというわけである。

(4) 独自の基準では、一人の学習者（L）が以前に自習したあいまいな記憶をもとに原因・理由と結果の関系の直接性について独自の説を考えたものであった。すなわち、原因と結果の関係がより直接的ではないときに「から」にしたと答えた。この説によると、頭が痛くて授業を休む（#01）のは、絶対に行けないほど痛かったわけではなく、ただ授業に行きたくないから休んだので直接的な関係ではないとLは考え、母語話者と反対の「から」を選んだ。

一方、「ので」を選んだ理由としては、(1) 話す相手が先生や年上の人（E）などの目上の人（A、C、G、H）、(2) 丁寧さ・改まり度・場面は、「『から』よりもっと丁寧」（B、E、G）で「やわらかい」（D）言い方で、話者がへりくだったり（C）、断ったり、何かができないなど否定的なことを説明したり（F、K）、言い訳や「残念な」気持ち（H）のときなどが挙げられた。このほか、論理的な原因・理由の説明（H）の場合や、夫婦間でも「お願い」をするとき（#10）には「ので」（I）のほうがいいと思った学習者もいた。(3) 前接形式としては、「から」と反対に、「あるので」（#8）のように常体に続く場合に「ので」を選ぶという学習者（I、J）がいた。(4) 独自の基準では、Lが「ので」は論理的で直接的な原因の場合に使われるとした。

一般的に、学習者は親密度の低い形式を選ばない傾向があった。例えば、「暑かったんでエアコンつけたよ」（#16）は母語話者でも2割ほどいたが、「ので」の縮約形である「んで」というのは聞いたことがないから選ばなかったという学習者が数名いた（A、H、J、L）。同様に使い分け指数が8点のうち2点と弱かった学習者Mは、「ので」そのものがあまり聞き覚えがなく、「から」のほうがよく知っているからほとんどいつも「から」を選んだと答えた。また、上司からの誘いを断る際に文末に言い切らない形が現れる項目（#05）では、母語話者のほとんどが「今晚は娘のピアノの発表会がありますので…。」を選んだが、文末に「ので…。」と言い切らないものはよく知らないもので、選ばなかったという学習者がいた（E、G、H）。学習者Eは、「ので」が来たら文が続かなくてはいけない感じがあり、「ありますから…。」で終わったほうが自然に感じられたのでそれを選んだと述べた。同様に、教科書ではたいてい「から…。」で終わるものしか見たことがない（H）、「ので…。」は聞いたことがない（G）から選ばなかったと述べた学習者も見られた。一方、逆に「ので」は文の途中で終わってもいいが、「から」は続けないとだめだと思っていた学習者も一人いた（I）。

学習者の中には他の学習者が「から」を多用することに言及した者もいた（A、I）。Aは使い分け指数が8と自分自身は使い分けが良くできたが、他の学習者がクラスでいつも「から」を使うので、自分の判断に疑問をもったことに触れた。また、Iは、「から」のほうがカジュアルな場面で使うという正しい認識があったが、「特に初級の学習者は「から」を使いすぎるので、自分は意識して中級で習う「ので」を使うようにしているかもしれない」と述べた。このようにIは「ので」の使用で初級の学習者との差別化を図っていたものの、かえって「ので」の過剰使用により、指数は「ので」が4、「から」が1で合計5と伸び悩む結果となった。

学習者の中には語用論的知識の流動性 (Ishihara, 2010) を示す回答をしたものがいた (C、J、N)。C はアンケートに答える際に、自分の規範意識が一貫した規則にのっとったものかどうか考えながら答えていったと述べた。J は初めのうちは、教科書「げんき」(坂野他, 1999) で習ったことを思い出し、前接形式が敬体のときは「から」、常体のときは「ので」を選んだ。しかし、5、6 項目回答した後で、その規則だけでは不十分であることに気がつき、さらに以前に、日本人の友人に教えてもらった規則を思い出し、それを当てはめようとしたと述べた。その学習者によると、その規則は「から」は理由に焦点があり、「ので」は結果に焦点があるというものだったかもしれないというように記憶はあいまいであったが、その二つの規則を組み合わせて回答したと述べた。一方、日本に前年の夏に 2 ヶ月滞在した際に初級文法を自習した N は、アンケートの前は「から」と「ので」は同じ意味だと思っていたと述べた。しかし、アンケートをしながら何か規則があるはずだと思い、自分が「から」のほうが自然だと思う場面ではしばしば学生の教師に対する発話だったため、「から」のほうがフォーマルであると仮定し、答えていった。その結果、N は使い分け指数の対象となったほとんどの項目で母語話者と反対のものを選択したため、指数は 1 と低くなった。

5-3. 結果のまとめ

いくつかの項目においては母語話者の選択は高い収束を示した (表 2)。しかし、学習者はほとんどの場合において母語話者の多数派と同じ選択をする傾向があるものの、母語話者に比べて収束度が低い傾向にあることがわかった (表 2)。第二言語習得における究極の目標は必ずしも理想化された母語話者に近づくことであるべきとは限らない (Firth & Wagner, 2007) という提言もされている。また、Kasper (1992) の指摘している通り、特に語用論的側面において母語話者の使い分けの選択には幅があり、常に 0 か 1 かはっきり区別できるものばかりではない (p.223)。本研究においても、選択が分散した項目もあり、それらについては、学習者を母語話者の傾向に近づける必要はないと思われる。しかし、極めて高い一致が見られた項目で、語用論的誤用と思われる項目については、ある程度指導が望ましいと言えよう。

習得順序に関しては、「から」の習得が「ので」の習得に先行する可能性が示唆された (図 2、表 3)。聞き取り調査によって、学習者は「から」と「ので」の使い分けを話す相手や場面によって求められる丁寧さ、前接形式などをもとに判断していることがわかった。使い分けがうまくできていた学習者は、相手との関係、言い訳や依頼などの機能に着目する場面が多かった。一方、使い分けがうまくできなかったのは、前接形式や原因と結果の関係など独自に考えた基準をもとに判断したり、「ので」そのものや「ので…」と言いついでない形の親密度が低く、より自分にとって見覚えのあるもののほうを選ぶという方略を取った場合が多かった。

6. 考察と今後の課題

「から」と「ので」を比べた場合、学習者は「から」の習得に比べて、「ので」の習得が遅れる傾向にあることが示された。小西 (2010) の学習者が最初に習った「から」のほうを使い続ける (p.5) と述べているように、本来は「ので」が使われるような場面でもインプットとして「から」を提示され続けることで先に学習した文法項目が自動化してしまう (大

関 2008, p.136) という現象によるものと思われる。

特に、母語話者のほとんどが「ので」を選択したような改まり度の高い場面での依頼、詫び、依頼に対する断り、誘いに対する断りなどで、「ので」の使用を促進させる必要があるものと思われる。そのためには、「ので」が使われるべき場面でのロールプレーをタスク先行(山内 1999、嶋田 2008)で行い、学習者の気付きを促すべきであろう。

さらに、萩原(2010)の推奨する「から」「ので」の使い分けチェックシート(p.144)などを活用することも考慮されるべきであろう。一方で、学習者の中には他の学習者の「から」の多用(すなわち「ので」の非用)に気付いている者もいたが、それが逆に「ので」の過剰使用につながってしまうケースも見られ、なんらかの教育的介入が望まれた。また、「ので…」のように「ので」で文末を言い切らない言い方を見たことがないために、それを選ばなかった学習者もあり、文中の「ので」ばかりではなく、文末に「ので」で言い切らない形を提示することも必要なのではないと思われる。

学習者は、回答をしながら同時に規則性を考え出そうとしたり、途中で変えたりしたケースもあった。また、選択の理由を聞かれても、ある一方のほうがもう一方より自然に聞こえたからという以上のことが言えない場合もあった。このように、語用論的規範は流動的かつ多様性があり、話者の無意識のうちに運用され、語用論的能力の評価は単純ではない(Ishihara, 2010)ことが示唆された。

また、今回は調査の対象としなかったが、実際の言語行為においては、「から」「ので」の使い分けがうまくできるだけでは不十分である場合もある。例えば誘いに対する断りの場合、藤森(1995)が指摘している通り、理由だけでなく「行きたくない」ことを明示するような回答は親しい相手に対する発話としても不適切になると言えよう。また、文末まで言い切るかどうかや、ジェスチャーやイントネーション等を含めて考える必要があるだろう。

最後に、本研究では、研究課題として母語話者の使い分け意識を対象としなかったため、母語話者への聞き取り調査は行わなかったが、使い分け意識や実際に母語話者の標準的使用から逸脱した学習者の「から」「ので」の使用が母語話者によって不適切と判断されるか、またその理由などについて調べることなどは今後の課題としたい。

参考文献

- 大関浩美(2008)「学習者は形式と意味機能をいかに結びつけていくか」『第二言語としての日本語の習得研究』11, 122-140.
- 小西円(2010)「日本語学習者による「から」と「ので」の使い分け ―運用と意識に着目して―」『多摩留学生教育研究論集』7, 1-7.
- 嶋田和子(2008)「プロフィシェンシーを重視した教育実践」鎌田修・嶋田和子・迫田久美子編『プロフィシェンシーを育てる』132-155. 凡人社
- 周升干(2009)「待遇表現から見る原因・理由を表す「カラ」「ノデ」―中国の日本語学習者と日本語母語話者を比較して―」『言語文化科学研究』4, 123-135.
- 永野賢(1952)「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29(2), 30-41.
- 萩原孝恵(2010)「日本語学習者のための「から」の語用論―接続助詞「から」と「ので」の適切な使用のために―」『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』132-147.

- 日本語 OPI 研究会 . http://www.opi.jp/shiryo/20th_anniv/132.thesis03.pdf
- 坂野永理、大野裕、坂根庸子、品川 恭子 (1999) 『初級日本語げんき』 ジャパンタイムズ
藤森弘子 (1995). 「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓
国人学習者の場合—」 『日本語教育』 87, 79-95.
- 前田昭彦 (2000) 「「から」と「ので」の主観と客観」 『比較文化研究』 49, 79-89.
- 谷部弘子 (1997) 「「のつけちゃうからね」から「申しておりますので」まで」 現代日本語
研究会 編 『女性のことば・職場編』 139-154. ひつじ書房 .
- 谷部弘子 (2002) 「「から」と「ので」の使用にみる職場の男性の言語行動」 現代日本語研
究会 編 『男性のことば・職場編』 133-148. ひつじ書房 .
- 山内博之 (1999) 「タスク先行型ロールプレイの実践方法について」 『岡山大学文学部紀要』
32, 107-116.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some Universals in Language usage*. Cambridge:
Cambridge University Press.
- Ellis, N. C. (2008). Implicit and explicit knowledge about language. In J. Cenoz & N. H.
Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of Language and Education* (2nd ed., Vol. Volume 6:
Knowledge about Language, pp. 1-13).
- Ellis, R. (1993). The structural syllabus and 2nd language acquisition. *TESOL Quarterly*,
27(1), 91-113.
- Firth, A., & Wagner, J. (2007). On discourse, communication, and (some) fundamental
concepts in SLA research. *The Modern Language Journal*, 91 (7), 757-772.
- Ishihara, N. (2010). Assessing learners' pragmatic ability in the classroom. In D. Tatsuki
& N. Houck (Eds.), *Pragmatics: Teaching speech acts* (pp. 209-227). Alexandria, VA:
Teachers of English to Speakers of Other Languages.
- Kasper, G. (1992). Pragmatic transfer. *Second Language Research*, 8 (3), 203-231.
- Lado, R. (1961). *Language Testing*. London: Longman.
- Pinto, D. (2005). The acquisition of requests by second language learners of Spanish.
Spanish in Context, 2, 1-27.
- Taguchi, N. (2007). Development of Speed and Accuracy in Pragmatic Comprehension in
English as a Foreign Language. *TESOL Quarterly*, 41 (2), 313-338.
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4, 91-112.

A cross-sectional study on L2 pragmatic competence in Japanese: subordinate conjunctions *kara* and *node*

Mamoru HATAKEYAMA

The pragmatic aspect of the subordinate conjunctions *kara* and *node* in Japanese may not be transparent to L2 learners of Japanese due to their similarities in syntactic and semantic properties which allow them to be interchangeable in many situations. Consequently, these items may become a source of pragmalinguistic failure (Thomas, 1983). In order to find the gaps in pragmatic norms between Japanese native speakers and L2 Japanese learners, an on-line survey was conducted. Some of the learners were interviewed to identify on which knowledge they based their judgment when they chose between these conjunctions. The native speakers exhibited high convergence on some items while the learners showed more variance. Results also suggested that acquisition of *kara* might precede that of *node*. A need for pedagogical intervention was suggested especially for the use of *node*, which ends in midsentence in formal situations where almost all native speakers chose to use *node*.

